

◆ 巻頭言

歩き出した福島の農業女性たち

西沢 江美子

東日本大震災と福島原発事故は、これまで長い時間をかけて積み上げてきた農業女性の「暮らし」を根底から奪い去った。農業を自分の意志にかかわりなく生きる糧として選ばざるを得なかった多くの村に生きる女たちは、安全なものを作ることを基本に据え、活動をしてきた。

農業女性は生命を宿す性をもちながら、山・田・畑の仕事と一緒に、家族の生命と健康を育む「台所」をこなし、自分の生命を削りながら他者の生命を考えるとという過酷な歴史を生きている。「職」と「住」の渾然一体が女たちに生命産業という農業の本質を意識させてきたのだ。

戦後の農業政策は機械化、農薬、化学肥料など規模拡大による近代化を進めてきた。村の女たちはこの流れに身を置きながらも、それまでの生き方を否定され、追われ、新しい農業に対する不安があった。不安の正体を知るために、家計簿記帳、労働時間調べ、農薬・肥料や食品添加物の学習など、みんなで学んだ。そして、病や死の原因が農業のやり方や村自体にあると知り、それらと闘うことを始めた。1960年代のことである。女たちは「もう私たちは農耕牛馬ではない。人間だ!」と言ったものだ。私はこうした女たちと50余年歩んできた。

農産物を作る人が不健康、不幸せであってはいけない。安全安心な食べ物を供給する人は、「人」として幸せでなければいけない。女たちは人権思想を根底に宿し、農薬に頼らない有機農法、土から離れない持続可能な家族農業、添加物なしの加工食品、大量生産・販売ではない直売所などを積み上げてきた。原発事故はこれらを奪った。

福島県だけでなく東日本の農民たちは、目に見えず終わりの不明な放射能汚染を生きている。1検体1万円余の検査料を払い、基準値以下を祈る農民に、風評被害が追い打ちをかける。ある農婦は、「私たちは被害者であると同時に加害者でもある。原発を受け入れてしまったのだから」と言う。今、私は福島県三春町で、全国の仲間からカンパを集め、太陽パネルによる自然エネルギーで小さな農産物加工グループを始めることにした。次世代へ手渡す安全な農業の模索が始まった。



PROFILE

西沢 江美子
(にしざわ えみこ)

ジャーナリスト。群馬県の小さな山村（旧中里村）の農家育ち。茨城大学農学部を経て、日本農業新聞記者。同紙に投稿欄「女の階段」を開設して農業女性の「書く」運動を、さらに投稿者による全国組織を結成した。フリーに転じ（1977年）、以来、農村女性に寄り添い、労働・社会保障など農業女性の人権問題と取り組み、現場から発信。著書に『米をつくる 米をつくる』（岩波ジュニア新書）等。